

Title	<講演>6. 二次抗結核剤の使い方の得失(京都大学結核研究所昭和40年度学術講演会)
Author(s)	吉田, 敏郎
Citation	京都大學結核研究所紀要 (1966), 14(2): 157-157
Issue Date	1966-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/51821
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

を行なって、部分的な肺胞性低換気の肺血管に及ぼす影響を観察した。尚、観察方法として -180°C の液化プロパン又は -196°C の液体窒素による肺冷凍標本を作成して、肺循環系の変化を形態学的にとらえる方法をとった。

その結果、100% N_2 群、90% $\text{N}_2 + 10\%$ CO_2 群ともに終末気管支の部位に相当した部位の小

動脈に筋層の著明な肥厚及び動脈内腔の狭少化が認められ、この傾向は90% $\text{N}_2 + 10\%$ CO_2 群に最も著明であった。

このことから、我々は肺胞性低換気の場合における肺血管抵抗の増大は局所反応であり、その部位は終末気管支の部位に相当した部位の小動脈と考えている。

5. 毛細血管に於ける phosphatase 反応

水 谷 昭 (病 理 学)

毛細血管が血管系と末梢組織との物質交換の barrier として重要な事は云うまでもないところである。一方、組織化学的に phosphatase 反応が、各種臓器の毛細血管に於て、屢々強陽性を示すことが知られている。例えば心筋組織では、夥しい毛細血管が筋組織を包む如く、或いはその間隙を縫う様に毛細血管が存在する。この毛細血管の微細構造は endothel (内膜細胞) が basement membrane (基底膜) を介して外膜細胞乃至は周囲組織と隔てられている。電顕

的組織化学的方法によれば、ATP その他のいわゆる specific substrate を分解する phosphatase は主として内膜細胞の pinocytic vesicle に存在するが、我々の方法では alkaline phosphatase も同一の部位に存在することが明らかになった。これは、この種酵素が active transport に関連ある事を暗示するが、更にその細胞膜での反応、基底膜(脳毛細血管その他では陽性)での反応等につき更に今後の検討を必要とする。

6. 二次抗結核剤の使い方の得失

吉 田 敏 郎 (内科学第1)

SM, PAS, INH 等一次抗結核剤を6ヶ月以上投与されて、しかも喀痰中結核菌培養陰性に到達しなかった肺結核患者の内 Kz を有する C 型及び F 型に属する重症を対象として KM, TH, CS 3 剤をそれぞれ6ヶ月以上使い果した場合にどのような使い方をしたものが最も有利であったか、後向きに検討した、扱て、私共の定めた効果判定基準より算出する推定成功率及び通算推定成功率を求めると、1 剤宛小出しに使ったの

では、3 剤を使い果して結局通算推定成功率は 13.0%，最初 2 剤併用、次に 1 剤の追加、又は変更の場合の通算成功率は、37.2%，初めから 3 剤を併用した場合の推定成功率は 54.3%，と格段に高くなった。この成績よりすれば、いずれ KM, TH, CS, の 3 剤を使用するならば小出しに使用するよりは一挙に 3 剤を併用する方が明かに有利である。

7. BCG ワクチン経口接種法に関する実験的研究

小 林 裕 (小児科学)

初回接種として BCG 300mg を経口投与した乳幼児では「ツ」アレルギーの獲得程度は弱い、既往に皮内接種をうけたことがあるものに

再接種として経口投与すると前者より遙かに高い「ツ」陽性率が得られた。

この場合「ツ」陽性率の上昇が感染防禦力の